1　国語

ＢＴ型探究的学習活動の視点を学習展開に取り入れた国語の授業実践

北村　拓也

本論の要旨

平成 28 年 8 月の「教育課程企画特別部会　論点整理」などにより，これからの学びの方向性が「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善」を通して，「主体的で対話的で深い学び」を実現することが明記された。そして，この 3 つの柱の一つである「深い学び」は，「事象の中から自ら問いを見出し，課題の追究，課題の解決を行う探究の過程に取り組む」ことが求められており，その一つの方法として，探究的学習が挙げられている。しかし国語の授業の中で探究的学習を行うことは非常に難しい。そこで，本校で 30 年以上取り組んでいる探究的学習活動「BIWAKO TIME」からヒントをもらい，国語科におけるより良い探究的学習の進め方について模索した。本稿では，BT の学習展開をいかして工夫を試みたことの成果と課題を分析し，国語科における探究的学習の在り方について考察する。特に，「テーマの設定」と「課題解決のプロセスの構築」の学習過程に関する実践を試みた。

キーワード　BT 型探究活動，テーマの設定，解決プロセスの構築，思考ツール，思考の手段

1. 研究テーマ設定について

(1)　テーマ設定のきっかけ

昨年度，「『適切に，論理的に判断する力』の育成を目指した国語の授業の創造」をテーマに研究に取り組んだ [1)]。その中で，「アクティブ・ラーニング」の実現も視野に入れ，生徒自らが問いを立てる学習課題や，課題解決に向けてのプロセスを立てる学習課題に取り組んだが，以下に挙げるような課題が残った。

例えば「文章を読んで，人物像をとらえるために，問いを立てる」という課題に取り組ませたとき，「問いを立てる」ということをイメージできない生徒が多くいた。そして「目的やねらいに適した価値のある問い」を設定できない様子が多くみられた。また「短歌に詠まれている情景をとらえる」という課題を与え，どのように問題解決をするかのプロセスを考えさせたとき，これまで何度も繰り返し学習してきた，文学的文章での場面の捉え方と関連付けて，「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「なぜ」「どのように」「どうしたのか」をとらえることが解決のプロセスになると考えられた生徒は非常に少なかった。このことから，これまでの国語の授業では，「問いを立てる」という学習課題の意図を伝えられていなかったことや，学んだことを活かして，課題解決のプロセスを組み立てる力を育てられていなかったことを痛感した。

つまり，「課題解決のために適切な問いを立てる力」や「課題解決のプロセスを組み立てる力」といった能力は，単元を貫く言語活動の授業展開では身に付けられなかった力である。そして，この課題を解決することが，これからの国語の授業をより一層充実させると考えた。

では，どうすれば解決することができるのか。そのヒントをくれたのが，本年度で 33 年目を迎える本校の総合学習「BIWAKO TIME（以下 BT と略記）」であった。

BT は総合的な学習の時間の基盤となった学習であり，「課題の発見」→「テーマ・問いの設定」→「調査研究計画作り」→「調査研究」→「発表」→「学びの振り返り」という学習のプロセスで進めている。具体的に「テーマの設定」ではテーマ関する「仮説」を立てさせてから，それに迫ることのできる「問い」の設定を行っている。また「調査研究の計画作り」や「調査研究活動」では，既存の知識を活かし，足りない知識を補い，思考ツールを用いて，課題解決に必要な思考の方法と思考の手段を生徒自らが選択して進めている。

これまで，本校の生徒は，国語の授業において「問いを立てる」や「課題解決のプロセスを組み立てる」という学習活動は行ってこなかったが，BT では経験済みである。そこで，BT の課題解決の視点を国語の学習に活かすことを試みた。

実際に，『走れメロス』を教材に扱った授業で，「『人質』を題材に書いた『走れメロス』で，太宰治が伝えたかったことは何か」という学習課題を与え，「それに迫ることのできる問いを立てる」という学習活動に取り組んだとき，BT の「問いの設定」で行っている流れを想起させ，課題に対する予想の答えを考えさせた後問いを立てさせると，適切な問いを立てることができていた。

このように，本校の財産であるBTの学習展開の視点を取り入れることで，「学習対象から問題を発見し，追究する価値のある課題を設定する力」や「問題解決に適したプロセスを構築する力」」といった「アクティブ・ラーニング」を進める上で必要な能力の育成を可能にし，これから求められる国語の授業作りにつながると考えた。

(2) 研究の目的

本年度より本校も，「探究的学習活動」と「よりよいアクティブ・ラーニング」をキーワードに，各教科の中で，BTで培ってきた探究的な学習活動の視点や学習プロセスを取り入れ，「論理的・創造的な思考・判断・表現する力」の向上を目指す研究に取り組むことになった。

また本年度，「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」[2]が出され，今後の学びの方向性が確認された。具体的には，「何を学ぶか？」と「どのように学ぶか？」と「何ができるようになるか？」の3つを柱とし，「どのように学ぶか？」の部分で，「主体的で対話的で，深い学び」の実現を目指した「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善が求められている。そして「深い学び」の中で，「各教科で習得した概念や考え方を活用した『見方・考え方』を働かせ，問いを見出して解決したり，自己の考えを形成し表したり，思いを基に構想，想像したりすることに向かう『深い学び』が実現されているかどうか」という視点で授業改善していくことが述べられ，「事象の中から自ら問いを見出し，課題の追究，課題の解決を行う探究の過程に取り組む」学習の例として，探究的学習が挙げられている。よって，国語の授業においても探究的学習に取り組んでいくことは明らかである。

文部科学省が定義する「探究的な学習」とは，「生徒が主体的に課題を設定し，教科横断的な視点から，問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習方法の総称」であり，「探究の過程」は，「①【課題の設定】→②【情報の収集】→③【整理・分析】→④【まとめ・表現】」とされている[3]。これに当てはめて，今の国語の授業を振り返ってみると，②・③・④については，日々の授業で取り組めている。課題となるのは「①【課題の設定】」の過程である。国語の授業で取り組んでいる，単元を貫く言語活動を通して国語の力を身に付ける授業スタイルは，教員が学習のゴールとなる課題を与え，課題解決のプロセスを示し，取り組ませることが多い。しかし，それでは探究的学習とは言えない。さらに，「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善の目標である学びを生徒に実感させ，それを社会生活の中で活かせるようにすることは達成できない。生徒自身が，直面した課題に対して，問題を見つけ，テーマを設定し，その解決過程や手段・方法を考え，

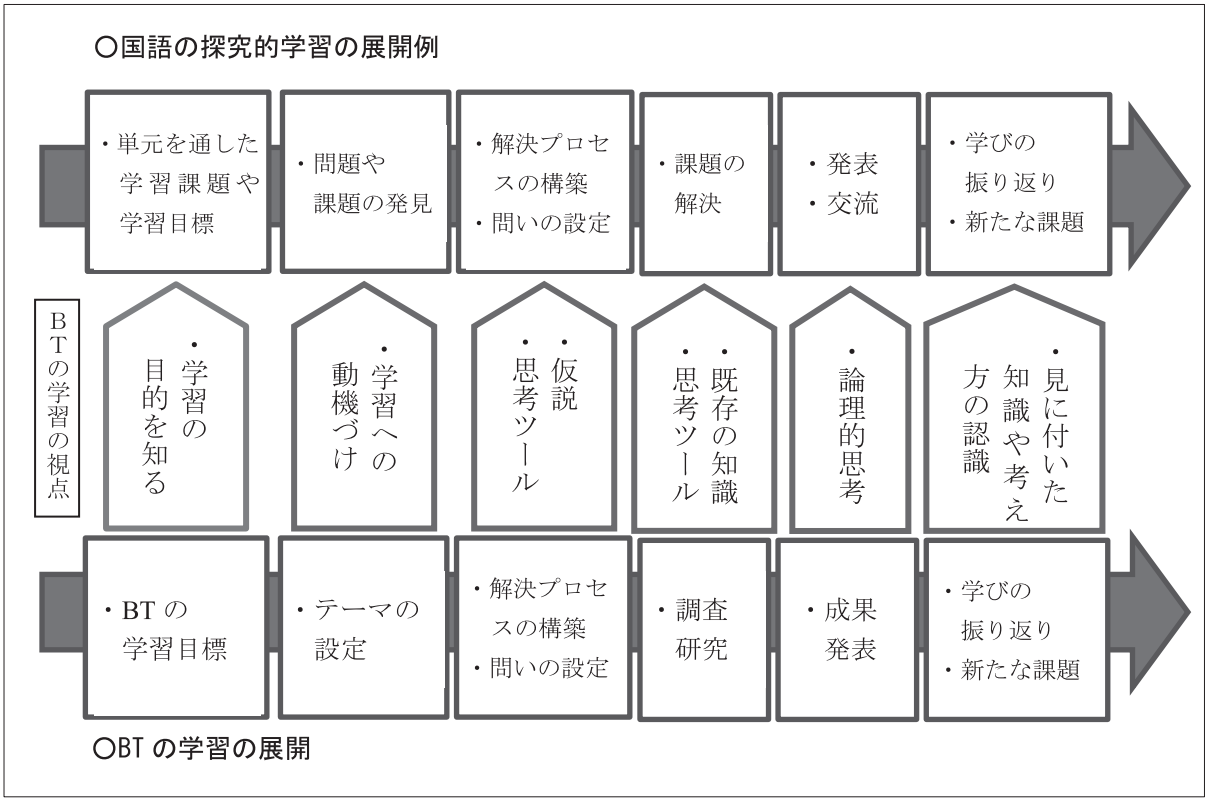


図1　BT型探究活動を取り入れた国語の学習展開イメージ図

解決できるようになることが必要である。そのために，国語の授業で探究的学習を行い，それを通じて「国語の力」を身に付けていくことが必要である。

先の**図１**は，国語の授業における探究的学習の展開と，BT の学習展開のとの関連を示したものである。BT での学習ポイントの中で，国語の探究的学習の展開に活用できる視点を抽出した。このポイントを意識して国語の探究的学習の実践を行い，その有効性について考察したい。特に本研究では，前述した通り，国語の授業で難しい「テーマの設定」場面に関する授業の実践を行った。

2. 実践報告

(1)「学習課題に対する動機づけ」と「課題解決プロセスの構築」，「課題解決方法・手段の選択」に関する実践事例

【単元名】「あふみのほそ道」を作ろう！
【対象学年】　中学３年
【教材】　「おくのほそ道」（三省堂）

①本校研究との関連

あ. 学習課題設定の工夫

・古典の世界をより身近に感じられるように，滋賀県に関わる教材を扱った。(13 か条②)
・「松尾芭蕉と滋賀・大津の関わり」を事前に調べることを通じて，大津にゆかりが多いことを実感させ，あまり知られていないという現状から問題点を発見させ，学習活動への意味を持たせるようにした。(13 か条①)
・学習の目標を意識させ，課題解決のプロセスを立てさせた。(13 か条③)
・学習の途中で課題に対する達成度を振り返り，よりよい課題の解決を目指して，「何が足りないか？」「何が必要なのか？」を明確にし，「そのために何をすればよいか」というよりよい課題解決に向けての問いや課題を挙げさせ，次のステップにつなげる展開にした。(13 か条①)

い. 思考ツールや学習形態の工夫，ICT の活用

・課題解決の場面で，生徒にどのように解決すればよいかを考えさせ，それに適した思考ツールを選択させた。(13 か条④)
・スライドで学習の流れや思考ツールの活用例を示し，視覚から伝わるようにした。(13 か条⑬)
・4 人グループで意見の交流を行い，共通点や相違点を学習に活かせるようにした。(13 か条⑩)
・各グループに学習リーダーを入れ，学習活動が進むように，深まるようにした。(13 か条⑪)

②工夫したこと・考察

あ. 学習のゴール課題への動機づけを高める工夫

本実践の学習のゴールを設定したとき，「古典教材であること」や「詞書を作ること」に対する生徒の抵抗の大きさが予想され，単元の導入部での，より確かな動機づけが必要であると感じた。

では，どのように動機づけを行えばよいのか。BT では，学習テーマを決めるときに，生徒の動機づけとなっているものは「実生活や実社会の中で，疑問に思っていること・問題であると考えていること・改善したいと感じていること」である。これを学習のゴールに当てはめて考えると，問題点は「松尾芭蕉と滋賀県のつながりは深いという事実は知っているが，自分たちにその実感はない」ということであり，改善点は「もっと滋賀で詠まれた俳句の良さを知ってもらわなければならない」ということになる。このようなことに気づくことができると，確かな動機づけになると考え，導入部分を組み立てた。

具体的な学習の流れは，以下のとおりである。

まず事前学習として，「松尾芭蕉」と「おくのほそ道」と「松尾芭蕉と滋賀・大津の関わり」について調べ，Y チャートに整理する課題に取り組ませた。また事前の調査として「芭蕉ゆかりの地で行ったことのある場所」として「浮世堂」「唐崎の松」「三井寺」「石山寺」「瀬田の唐橋」「義仲寺」を対象にアンケートを行った。

実際の授業では，「調査結果から問題点を発見しよう」という学習テーマで行った。事前学習で調べた結果を交流し，「松尾芭蕉と滋賀・大津の関わり」について知り，どのような感想を持ったかをまとめさせた。多くの生徒が，松尾芭蕉が，自分たちの故郷を愛してくれていたことへの感謝や喜びを表現していた。次に，松尾芭蕉に関して「何か問題に感じることや改善すべきことはないか」を問いかけたところ，意見は出てこなかった。そこで，事前のアンケートの結果を示し，滋賀県に住んでいながら，自分たちが芭蕉ゆかりの地をあまり訪れていない事実や，身近にある句碑の存在に気が付いていなかった事実を伝えた。すると，自分たちの芭蕉に対する関心の低さを意識し始め，もっと芭蕉の句について知り，さらにみんなにも知ってもらわなければいけないという気持ちが芽生え始めた。そして実際の句碑の画像を見せ，「この句碑に，どのような情報を付け加えるとよいか」を考えさ，本単元のゴールにつなげた。このような展開を行ったことにより，動機づけがうまくいき，学習課題への意欲が高まった。特に，芭蕉は滋賀や大津を愛してくれていたが，自分たちは本校から 700 メートルほどしか離れていな

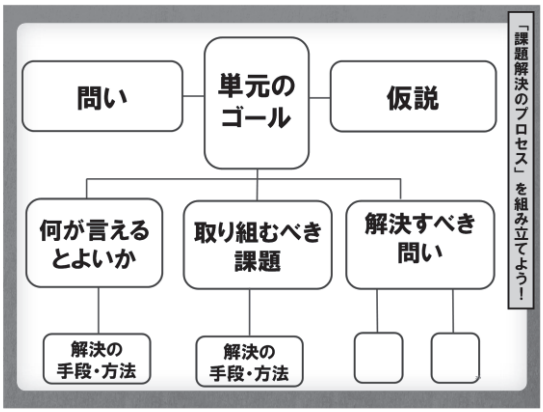
い，よく通る場所に句碑の存在にすら気が付いていなかったギャップを知ったことが大きかったと考える。

学習課題に対する問題点を発見させることは，確かな動機づけにつながると感じた。

い.「課題解決プロセスの構築」に関する工夫

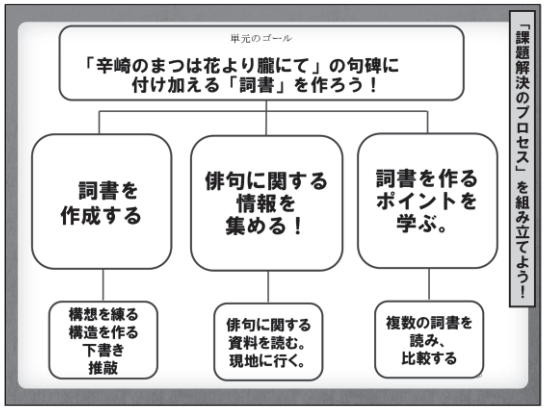
課題解決のプロセスをイメージする学習活動は，国語の授業の中で取り組んでいたが，これまではプロセスをノートに書かせ，周囲と交流させる程度であった。本実践では，BT での調査研究計画をたてるときに活用する「ピラミッド・ストラクチャー(＝PS)」を用いてプロセスを構築させた。

BT では，一番上の階層に「研究テーマ・問い・仮説」を，中間の階層に「何が言えるとよいか（調査研究すべきこと）」を，一番下の階層に「必要なデータ・事例・調べ方」を記入させている(**資料 1**)。



資料 1　BT で使用する PS の

それを参考に，本実践では，上段に「単元のゴール」，中段に「取り組むべき課題・解決すべき問い」，下段に「課題解決の手段・方法」を記入させるようにした。その後グループで交流し，発表させ，クラスで統一した解決のプロセスを作った(**資料 2**)。



資料 2　生徒の意見を踏まえて完成させた PS

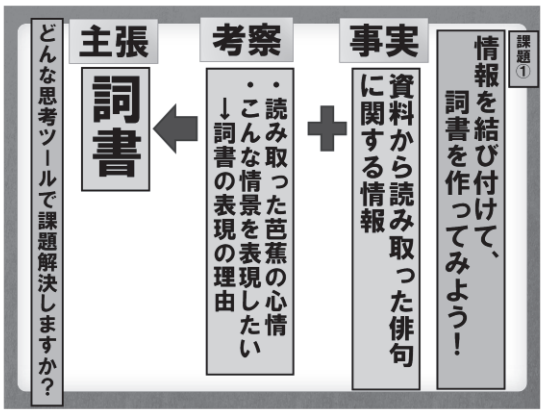
本年度，何度か思考ツールを用いての課題解決のプロセスを組み立てさせる学習に取り組んだ結果，発見したことが 2 点ある。

1 点目は，学習プロセスの中で，必ず必要である過程が，本実践での「詞書や書き方について学ぶ時間」や，俳句を作る単元での「俳句の作り方を学ぶ」時間といった，学習対象の基本的情報や基礎知識を学ぶ時間だということである。BT でも，テーマに関する基本的情報を十分に得た上で調査研究を進めないと，浅い研究で終わってしまうことが多い。しっかりと基礎基本を理解した上で，学習に取り組ませることが重要である。

2 点目は，教員が学習する過程を提示するのではなく，生徒の中から引き出すことで，学びの意欲につながる。さらに，それが教科書の教材から学ぶことにつながると，学習する必然性が生まれる。これは，課題解決のプロセスを考えることのメリットであると感じる。

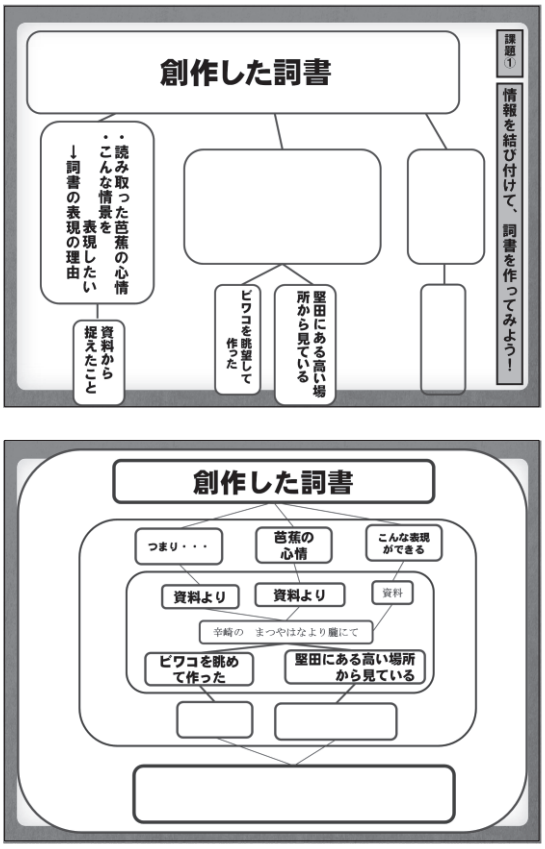
う. 思考の手段・方法を選択させる工夫

「おくのほそ道」から詞書に関する基本的な知識を学び，「辛崎のまつは〜」の俳句に関する歴史的事実を資料から集めた後，それらを結び付けて詞書の構想を練る学習課題を行った。その時に，どの思考ツールを用いて課題解決をするのかを生徒に選択させる方法を取った。その際に生徒がつまずく部分が，「事実（資料から読み取ったこと）」と「主張（実際の詞書）」を結び付ける「考察」の部分であると考えた。この場合の「考察」とは，「詞書の表現の理由（資料からこんな芭蕉の心情がよみとれるから，このような表現を用いた）」である。そのことを意識させた上で，思考ツールを選べるようにした（**資料 3**)。



資料 3 思考ツール選択時に示したスライド

また，いくつかの思考ツールのモデルを示し(**資料 4**)，イメージがしやすいように工夫をした。



資料 4　思考ツール活用例のスライド

思考ツールを選択させるときの問題点は，生徒が誤った思考ツールを選択することである。今回の課題の場合は，「複数の事実を結び付けて考察し，主張につなげる」という思考の過程を踏まえると，PS や同心円マップ，マトリクスを使うべきである。しかし，中には「三角ロジック」や「ステップチャート」を用いる生徒が見られた。

生徒に間違った判断をさせないために，選択させる前に，全体で課題解決に必要な思考の手段（比較する・結びつける・構造化するなど）をイメージさせ，それに適した思考の方法を選べる力を伸ばしていかなければならない。適切な思考の手段や方法を選択できる力は，探究的学習を行う上で，とても重要なポイントとなるであろう。

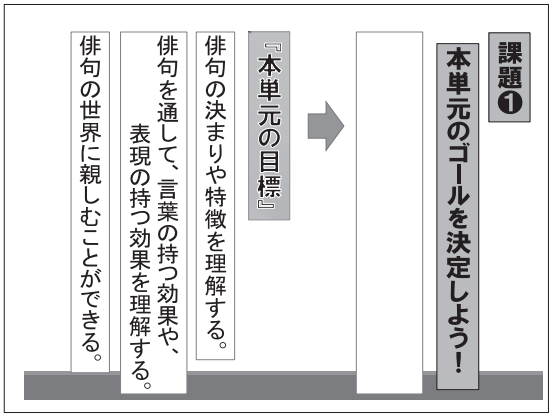
(2)「テーマの設定」に関する実践事例

【単元名】　俳句を作り，
　　コンクールに応募しよう！
【対象学年】　中学３年
【教材】「俳句の世界」「俳句十句」（三省堂）

国語の授業が「単元を貫く言語活動を通して指導事項を身に付ける」というスタイルになってから，「単元のゴール」を教員が設定して進めている。その中で，生徒の主体的な学びの視点から，学習のゴールや達成に向けての学習計画を生徒に設定させる必要性も指摘されている。しかし，実際の授業の中で行うことは非常に難しい。なぜなら，生徒のイメージするゴールが必ずしも全員一致するとは限らないからである。では，どのようにすればよいのか。

BT でのテーマ設定で考えると，生徒は自由に決めているようであるが，実は基準がある。それは，BT の学習目標と調査研究の領域（文化・社会・自然など）である。定められた範囲の中で，目標を達成できるように，テーマを決めている。

これを国語に当てはめると「学習目標＝単元を通じて身に付けたい力」，「領域＝教材」である。そこで，教員が「身に付けたい力」を提示し，「俳句」を教材にして，それを達成できる単元のゴールを考えさせ，グループごとに，理由を踏まえてプレゼンテーションするし決定する展開で学習を行った(資料 5)。



資料 5　テーマ設定で用いたスライド

生徒の考えたゴールは以下のとおりである。

① 俳句を作る（16 グループ）
・クラスの句集を作ろう！
・滋賀の風景を表す俳句を作ろう！
・感情を俳句にしよう！
・３年間の思い出を俳句にしよう！
・2016 年を振り返って，俳句を詠もう！
② 俳句を鑑賞する（4 グループ）
・俳句の解説文を作ろう！
・好きな俳句の良さを交流しよう！
③ 情景を絵で表現する（3 グループ）
・俳句に詠まれた情景を絵で表現しよう！
④ 俳句とは何かを伝える(3 グループ)
・小学生に「俳句」を説明しよう！
・外国の人に俳句の魅力を伝えよう！

予想通り「俳句を作る」ことをゴールに設定した生徒が多かった。学習の目的を提示したことが，教員の意図するゴールにつながったと考えることができる。また，プレゼンテーションするときも，学習目標を根拠に意見を述べることができており，活発に議論することができていた。

3. 研究を振り返って

本年度の研究の成果を挙げる。

- 動機づけの場面では，学習課題から問題となる点を発見させるとよい。
- 課題解決のプロセスを構築する学習活動では，学習のテーマを意識させるとよい。
- テーマの設定や「問い」を立てときには，学習目標や学習の目的を基準に考えさせるとよい。

やはり探究的学習を行う上で，BT の視点を取り入れることは有効である。BT の学習展開の要素を取り入れることで，これまで難しいと感じていたテーマの設定や，課題解決のプロセスの構築といった学習過程の場面がスムーズに行えるようになった。

さらなる課題は次の 2 点である。

1 つ目は，探究的学習を進めるために，生徒自身が適切な思考の手順を踏めるように，課題解決の力を伸ばしていかなければならないことである。平成 25 年度に「思考のステップを思考する国語の授業」[4] の研究に取り組んだが，その時は思考の方法，いわゆる思考ツールを組み合わせたプロセス作りに過ぎなかった。しかし課題解決のプロセスを組み立てるには，それだけでは不十分である。まず，どのような思考の手段が必要なのかを，生徒自身が具体的にイメージし，それを解決できる思考ツールを選択できる力を身に付ける事が必要である。この能力を身に付けるために，もっと思考の手段をイメージさせる学習活動を取り入れたり，思考の手段と思考ツールのつながりを視覚で理解できるように一覧表を作成したりする工夫が求められる。

2 つ目の課題は「探究的学習活動を通して，いかに国語の力を身に付けるか」ということである。本年度，探究的学習を意識して国語の授業をする中で一番感じたことは，「国語の力」を身に付けているというよりは，「課題を解決する力」を身に付ける授業になっていたということである。本研究を通じて，教科の力とは別に，「探究するために必要な力」があることを感じ，この力を伸ばしていくことも重要である。しかし，国語の授業では，あくまでも「国語の力」を身に付ける時間である。探究的学習活動を通じて，「国語の力」を身に付けるために，この 2 つの結びつきを明確にしなければならない。

その解決策として，次の 2 点が考えられる。

1 点目は，前述した 4 つの「探究の過程」を，一つの単元で全部行うのではなく，過程を絞って行うことである。すべて扱うと，単元の字数が長くなり，生徒も学ぶ情報量が多くなるため，学習したことの整理が難しくなる。また，視点を絞ることで，「探究に必要な力」と，指導事項で定められている「国語の力」とを結び付けやすくなると考える。

2 点目は，学びを一般化したところまで引き上げることである。例えば「文学的文章から人物像をとらえる」学習に取り組ませるとき，「本文中の描写、とりわけ行動描写や心情描写に注目することが必要であること」「行動描写や心情描写に対し，『なぜ？』という視点で問いを立て、答えを導き出すこと」「読み取った人物像を重要度でランキングすること」「主人公の心情の変化に関する人物像が一番大切な人物像になること」という様に，学びが一般化された状態まで，授業の中で高められていると，次に同じような課題に出会ったとき，その学びを活用し，課題解決をすることができる。これからの教育の中で，生徒に一番身に付けたいことは，新しい課題に直面したときに，それを解決できる力である。そのためには，教材や単元を通じて学んだことや身に付けた力を一般化し，次の課題に活かせるようにしておくことが必要である。そうすることで，「国語の力＝探究するために必要な力」になると考える。

探究的学習を学びの手段として，生きた国語の力を伸ばしていけるように，本年度の成果と課題を活かしながら，次年度も研究に取り組みたい。

参考文献

1) 北村　拓也　「『適切に，論理的に判断する力』の育成を目指した国語の授業の創造」，『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第 58 集』，2015，pp. 14-19

2) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」，中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会，2016. 8. 26

3) 「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」，文部科学省，2010. 2 月

4) 北村　拓也「思考ツールを活用し『的確に読む力』を育てる国語の授業づくり－『思考するステップも思考する』国語の授業－」，『滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要第 56 集』，2013，pp. 14-19